

『理論と動態』スタイルガイド

特定非営利活動法人
社会理論・動態研究所
『理論と動態』編集委員会
第1版 2010年10月作成
第2版 2013年1月改訂
第3版 2013年7月改訂
第4版 2015年11月改訂

※ 『理論と動態』の原稿は、基本的に『社会学評論』スタイルガイドに沿って執筆するものとする。

参考:『社会学評論』スタイルガイド web site (<http://www.gakkai.ne.jp/jss/jsr/JSRstyle.html>)

※ 下線を引いた箇所は、今までの編集で特にミスが多かったものです。確認をお願いします。

1 『社会学評論スタイルガイド』との相違点

1.1 句読点

『社会学評論』

「,」と「.」

『理論と動態』

「、」と「。」

1.2 本文中の文献注

『社会学評論』

(山口 2009: 12-23)

『理論と動態』

[山口 2009 : 12-23]

※ 全角四角括弧、著者苗字、半角スペース、出版年、全角コロン、引用開始頁(半角英数字)、半角ハイフン、引用終了頁、全角四角括弧

1.3 【文献】の雑誌などのページの記載法

『社会学評論』

宮崎あゆみ, 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス——女子高におけるエスノグラフィーをもとに」『教育社会学研究』52: 157-77.

『理論と動態』

宮崎あゆみ, 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス——女子高におけるエスノグラフィーをもとに」『教育社会学研究』52, pp. 157-77.

1.4 本文中の書式設定

『社会学評論』

40行×40文字

『理論と動態』

38行×42文字（参考：『理論と動態』2号）

1.5 『社会学評論』への投稿原稿ではなく、『社会学評論』の印刷原稿である点

例えば『社会学評論』へ投稿する際は、見出しをセンタリング、太字にする必要はなく赤字で見出しと明記するが、『理論と動態』に投稿する際には『社会学評論』の印刷原稿であるのでそれらを行う。また要約や図表も『社会学評論』では投稿する段階では別紙で提出するが、『理論と動態』の場合は該当箇所に挿入する。

1.6 本文中の人名の表記方法

日本語の人名は、初出時にはフルネームで、それ以降は苗字のみで表記する（同じ苗字の異なる著者名を表記する場合はそれ以降もフルネームで表記する）。日本語以外の人名は、初出時にはカタカナでフルネームの音声表記（フルネームの原語表記）、それ以降はそれぞれ Family name のみをカタカナで表記する。

例：初出時は山本義男、ルイス・ワース（Louis Wirth）、イ・ヨンスク（이연숙）とする。それ以降は山本、ワース、イと省略する。

2 特に留意が必要な点（『社会学評論』スタイルガイドから抜粋）

2.1 本文に関する点

- ・本文中の漢字とひらがなの基準について

接続詞、副詞、助動詞は、ひらがなで表記。「例えば」→「たとえば」

形容詞は言及がないので漢字でも可。

複数を示す「達」も「たち」。

「にも拘わらず（「にも関わらず」は間違い）」も「にもかかわらず」。

- ・数字に関する事項

初出時から西暦表示を70年代とするのは不可。初出時は1970年代とし、以後は70年代と省略可能。基本的に西暦で記載すること。

また4桁以上の数は、123,456 とコンマを付ける（この場合に限って、コンマ後の半角スペースは不要）。

- ・記号について

著者がある概念を強調したい時は、「」でなく〈〉で表す。「」は短い引用で使用する

ために混乱する。

日本語の言葉に原語を付け加える場合は、() で表す。例：共同体 (community)。

引用やインタビューの著者による補足説明は [] で表す。例：昭和 50 年 [1975 年——著者]、「わじわじ [気分がイライラすること——著者] した。」

「・」は and、「/」は and/or の意味

・ある論者に言及する際は、日本人も非日本人でも最初はフルネームでそれ以降はファミリーネームに省略可。

本文では ファースト、ミドル、ファミリーの順番。しかし [文献] のリストではファミリー、ファースト、ミドルネームの順番で記載する。

・本文中の短い引用について

短い引用を行うカッコ内は文章であっても「。」は不要。

ただし引用で文が終わるときはカッコの外に「。」をつける。

短い引用に文献注を付ける際は、「 」のあとに付ける。

・本文中の長い引用について

長い引用は、前後 1 行改行して、2 文字下げ、文献注は短い引用と異なり句読点のあと

ただし、注において長い引用を行う際は前後の改行は不要、ただしさらに 2 文字下げ

・表は表の上にゴシック体でタイトルを付け、図は図の下に同じくゴシック体でタイトルを付ける。

・要約、本文ともに文字数にはスペースを含まない。

2.2 注に関する点

・注は文献の参照を求めるためのものは不可。

例：12) 山田 (2009) を参照せよ。(×)

・本文中の注の番号の位置は、「 」の後ろ、句読点の前につける。

例：「 」¹⁾と定義する。前者の考えが優勢と考えられ²⁾、結論はそのように導かれる³⁾。

・[注] は word の挿入機能を用いず、以下のように文末に入れてください。

・最後の [注] は、番号が一桁の際は前に全角スペース、2 桁の時は半角スペースではじめる。
2 行目にかかる際は 2 文字下げ。

例：

9) 補足すると、——である。

- 10) キセツとは、数か月から半年の間、沖縄を出て住み込みで働く就業スタイルの若者による呼称である。語源は「季節労働」である。

2.3 文献に関する点

・文末の〔文献〕リストは、引用文献のみで、参考文献、参照文献は記載しない。

・査読での完全匿名制を担保するため、自らの過去の著作からの引用に際しては、伏字にする。
例：〔●●〕：引用頁]

・自らの過去の著作を文献リストに記す場合にも伏字にし、西暦発行年、雑誌名、著書名、出版社名などの一切を無記入とする。

・本文中に記載する文献注で、〔前掲書〕、〔op cit〕は使用できない。

・本文中の文献注、文末の〔文献〕リストとも、共著者が3名以上の場合は、すべて記載せずに〔青山ほか 2001〕、〔関根ほか編 2003:23-6〕、〔Hall ed. 2001〕、〔Jimmy eds. 2003 : 34-6〕と表記する。

・複数の著者の文献注はセミコロンのみで、同一著者の複数の著書の文献注はコンマでつなぐ。
例：〔山田編 2008 : 23-6; 内田 2006, 2008 : 56-90〕

・新聞からの引用は以下のように表記し、文末の〔文献〕リストには入れない。
〔『中国新聞』2007.12.5〕、〔New York Times, September 7, 1990〕

・英語論文の文献中は、以下のように表記する。

例：(Aoki 2010: 12-34)

半角丸括弧、著者名、半角スペース、発行年、半角コロン、半角スペース、引用開始頁、半角ハイフン、引用終了頁、半角丸括弧閉じ

・〔文献〕リストの順番の優先順位

- 1 アルファベット順、2 単著→単独編著→共著→共編書、3 出版年
- それでも同じ場合は、出版年に a b c を付けて区別する。

・〔文献〕リストで、日本語の文献には記載する必要はないが、それ以外の言語の文献には出版都市名を出版社の前に以下のように記載する。

Claude S. Fischer, 1982, *To Dwell among Friends: Personal Networks in Town and City*, Illinois, U.S.A.: The University of Chicago. (=2002, 松本康・前田尚子訳『友人の間で暮らす——北カリフォルニアのパーソナル・ネットワーク』未来社.)

・日本語文献で用いる「,」は全角でスペースはいれない。日本語以外の文献で用いる「,」「.」は半角で、後ろに半角スペースを入れる。

・タイトルの大文字／小文字

タイトルは、前置詞、接続詞、冠詞以外は大文字ではじめる。すべて大文字のものは、頭文字以外を小文字に変更する。

・非日本語文献は、著作タイトル、論文雑誌名を斜体で、論文タイトルを””で表す。

タイトルで””が使用されている際は、'’に変える。

・初版と重版

[初版出版年] 引用した版の出版年を表記する。

Whyte, William Foote, [1943] 1993, *Street Corner Society*, Fourth edition, Chicago, Illinois, U.S.A.: The University of Chicago Press. (=2000, 奥田道大・有里典三訳『ストリート・コーナーソサエティ』有斐閣.)

・文献表の日本語文献の出版社は、岩波文庫などのシリーズ名ではなく、岩波書店と出版社名を記載する。

・講座本などのサブタイトルの判断が難しい場合は、半角スペースを使用できる。

例：『講座社会学 12 環境』

・共著者は基本的には「・」でつなぐが、非日本人を含む場合は、「／で代用」

例：山田雄二／カール・マルクス, 1999, 『共同体と社会』岩波書店.

・編者が団体の際は、編を省略できる。

・出版社とページを記載する場合

赤木智弘, 2007, 「『丸山眞男』をひっぱたきたい——31 歳フリーター. 希望は, 戦争.」『論座』岩波書店, 140: pp. 53-9.

・訳本は、前半の非日本語は半角で、後半の訳語情報は全角

日本語文献とは異なり、訳本情報は、翻訳年、訳者の順番

・出版年不明は出版年の代わりに「n. d.」、未刊の場合は「近刊」「forthcoming」と記載。

・調査報告書、政府刊行物、修論、学会報告原稿、ホームページ等の記載は以下のとおり。

- 青山喜久雄，1999，『同和地区における子育ての現状と課題に関する実証研究』1996-1998 年度科学研究費補助金研究成果報告書，東京大学。（年号を西暦に変更可）
- 経済企画庁，1994，『国民生活白書（平成6年版）』。（出版社は省略可）
- 山口県，1972，『第13次山口県総合開発計画』。
- 宮崎良子，2003，「ホームレス支援と福祉行政」札幌国際大学大学院社会学研究科2002年度修士論文。（後期提出の場合は、提出年と年度は1年ずれている点に注意）
- 吉崎一，2000，「ハンセン氏病者の意味世界」第77回日本社会学会大会報告原稿。
- 宮野勝，1997，「社会調査の参考資料ガイド（入門編）」
(<http://syajyo.tamacc.chuo-u.ac.jp/~miyaken/cyosa.html>, 1998.12.10)。（最後の日付はアクセス年月日、最初の年は公表年か最新の更新年）

2.4 概要に関する点

- ・欧文要約で、カッコは半角のスペースをとってから用い、閉じた後にも半角のスペース。
- ・タイトルとは異なり、欧文のキーワードは固有名詞を除いて、すべて小文字。

3 書式の一例

『社会学評論』スタイルガイドに記されていない、改行やフォントの設定について参考にしてください。

タイトル（明朝 14、太字、中央よせ）

——サブタイトル（明朝 12、中央よせ）——

(改行)

本稿の目的は——である。

その目的を達成するために以下の方法をとった。1つ、——。2つ、——。

結論は、——である。（和文概要 600 文字以内、フォント明朝 10.5）

(改行)

キーワード（3つ）：社会、共同体、社会関係資本

(改行)

(改行)

1 問題提起（ゴシック 12、太字、中央よせ）

(改行)

本稿の目的は——である。

(改行)

2 調査の方法（ゴシック 12、太字、中央よせ）

(改行)

本稿は以下の方法で問題にアプローチした。1つ、——である。2つ、——である。

(改行)

長めの引用 (2文字下げ)

(改行)

2.1 生活史インタビュー (ゴシック 10.5、太字)

生活史インタビューとは、——に適した調査方法である。

(改行)

2.2 参与観察 (ゴシック 10.5、太字)

参与観察は、——に適した調査方法である。

2.2.1 事例 I (ゴシック 10.5、太字、2.2 までと異なり 2.2.1 以降は上の行の改行はなし)

本文。

(改行)

3 結論 (ゴシック 12、太字、中央よせ)

(改行)

本稿の結論は——である。

(改行)

[注] (ゴシック 10.5、太字)

- 1) 親の職業もまた年収も知らない彼・彼女らを下層若者としたのは、以下の理由による。1つ、10代の頃から実家との関係が不安定であること、2つ、その結果、極めて厳しい仕事に就く、もしくはそれに代わる手段を選択せざるをえないこと。
- 2) 北海道や東北地方の農家が、仕事のない冬季に都会へ出稼ぎに出ることを季節労働という。昨今の沖縄の下層若者は、慢性的な失業状態ゆえに、季節によらず年間を通して日本で働いている。彼・彼女らは、その就労形態を「キセツ」と呼ぶ。

(改行)

[文献] (ゴシック 10.5、太字)

Claude Lévi-Strauss, 1958, *Anthropologie Structurale*, Paris: Librairie Plon. (=1972, 荒川幾男ほか訳『構造人類学』みすず書房.)

(改行)

【欧文要約】

Title: Subtitle (ゴシック 12、中央よせ、前置詞、冠詞以外は頭文字を大文字)

(改行)

In this essay, ---. (欧文要約 300 語以内、century10.5、スペースは半角 1 文字)

(改行)

Keywords: society, community, social capital (固有名詞以外は小文字、スペースは半角 1 文字)